

ディルムンを掘る

—バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト 2020—

安倍 雅史 東京文化財研究所研究員
 上杉 彰紀 金沢大学国際文化資源学研究中心特任准教授
 岡崎 健治 鳥取大学助教
 佐々木蘭貞 九州国立博物館客員研究員
 間舎 裕生 東京文化財研究所アソシエイトフェロー

Archaeological Research on Dilmun: The Bahrain Wadi al Sail Archaeological Project 2020

ABE, Masashi Researcher, Tokyo National Research Institute for Cultural Properties
 UESUGI, Akinori Associate Professor, Center for Cultural Resource Studies, Kanazawa University
 OKAZAKI, Kenji Assistant Professor, Tottori University
 SASAKI, Randy Visiting Researcher, Kyushu National Museum
 KANSHA, Hiroo Associate Fellow, Tokyo National Research Institute for Cultural Properties

1. はじめに

ディルムンは、メソポタミアの文献史料に登場する周辺国の1つである。この王国は、前2千年紀前半(前2000年～前1700年)に、南メソポタミアとオマーン半島、インダス地域を結ぶペルシア湾の海上交易を独占し繁栄したことが知られている。現在、ペルシア湾に浮かぶバハレーンが、ディルムンに比定されている。ディルムンの繁栄ぶりを示すのが、バハレーンに残されている無数の古墳である。最新の研究によれば、バハレーンには前2300年から前1700年にかけて7万5千基もの古墳が築造されたという推算がある。

2. バハレーン・ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト第1期

バハレーンには、複数の古墳群が存在する(図1)。古墳群は、築造方法や立地、密集度の違いなどから、ディルムン形成期(前2300年～前2050年)のものと同文明期(前2050年～前1700年)のものに区分される。筆者たちは、2015年からバハレーンに唯一現存する形成期の古墳群であるワーディー・アッ=サイル古墳群にて発掘調査を行っている(図1)。

2015年から、後藤健先生を団長に5年間にわたりバハレーン・ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト第1期(第1次～第5次調査)を実施した。第1期は、科研費基盤研究(B)「ディルムン文明の起源—

バハレーン島における古墳群の考古学的調査研究」(研究代表者：後藤健、課題番号：2630030)によるもので、合計17基の古墳を発掘した。

第1期では、とくにディルムンの起源に焦点をあて研究を行った。バハレーンでは、前4000年～前2300年にかけて人が居住した痕跡がきわめて希薄である。そのため、前2300年頃にバハレーンに大規模な集団の移住があったと推定されている。それでは、のちにディルムンとして繁栄するこの集団は、どこからバハレーンに到来したのか？ 筆者たちは、ディルムン最古の古墳群であるワーディー・アッ=サイル古墳群と周辺地域の墓制との比較を行った。その結果、ワーディー・アッ=サイル古墳群と類似した積石塚古墳群が西アジア内陸沙漠北部に広く分布していることが明らかとなり、ディルムンの系譜は西アジア内陸沙漠北部に暮らしたアモリ系遊牧民に辿ることができるという仮説に達した(安倍ほか2017)。

なお第1期の具体的な発掘成果に関しては、昨年の夏に出版されたProceedings of the Seminar for Arabian Studies 50に寄稿しているので、ご覧いただきたい(Gotoh et al. 2020)。

3. バハレーン・ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト第2期第6次調査

2020年からは、あらたに第2期を開始した。この第2期は、科研費基盤研究(S)「中東部族社会の起

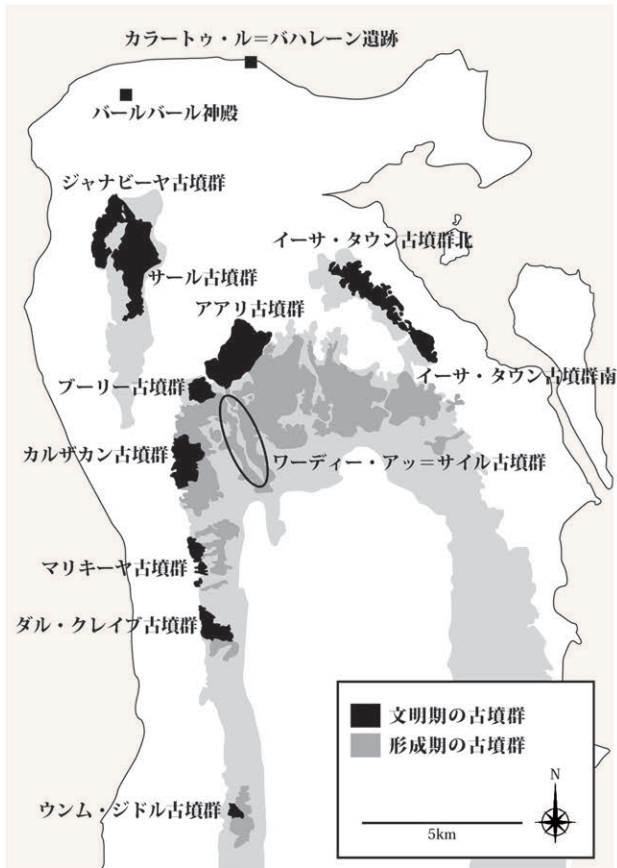


図1 バハレーンにあるディルムン関連遺跡

源：アラビア半島先原史遊牧文化の包括的研究(研究代表者：藤井純夫、研究課題／領域番号：19H05592)の一環として実施されている。以下、2020年1月、2月に実施した第6次調査の成果を報告したい。第6次調査では、ワーディー・アッ=サイル古墳群での発掘調査を継続したほか、バハレーンの水中文化遺産に関する予備調査や社会的な活動を実施した。

3.1. ワーディー・アッ=サイル古墳群の発掘調査

3.1.1. 子持ち古墳とは？

ディルムンの古墳の中でとくに興味深いのが、「子持ち古墳」である。「子持ち古墳」とは、主要な古墳の外壁に小古墳が1つあるいは複数接する古墳である(図2)。

1970年代後半に、高速道路建設に先立ち、サール古墳群で緊急発掘が行われた。この際に、はじめて子持ち古墳が確認された。子持ち古墳の小古墳からは人骨は出土しなかったものの、小古墳の石室の小ささから判断して、子持ち古墳は、主要な古墳に親、小古墳に子供を埋葬した家族墓であろうと推定された。1980年代になると、新興住宅地の建設に伴いハマドタウン古墳群の緊急発掘が実施された。この調査ではじめて子



図2 95号墓(主要古墳の南側に小古墳が2基付随している)

持ち古墳の小古墳から子供の骨が検出され、小古墳には実際に子供が埋葬されていることが明らかとなった。

その後、子持ち古墳の発掘件数も増加し、B・フロリッヒらが、子持ち古墳に関して総合的な研究を実施している(Frohlich and Ortner 2000)。彼らの研究は、小古墳を伴わない単独の古墳あるいは子持ち古墳の主要古墳には16歳以上の大人が埋葬されており、子持ち古墳の小古墳には新生児から15歳までの子供が埋葬されていることを明らかにした。また、近年、S.T.ラウルセンが、形成期の子持ち古墳16例の集成を行い、主要古墳の南側に小古墳が作られること、大型の古墳ほどより多くの小古墳を伴う傾向があることを指摘している(Laursen 2017)。

しかし、一般的にバハレーンの人骨の残存状態は悪く、「子持ち古墳の主要古墳に埋葬されているのは父親なのか、あるいは母親なのか?」といった基本的な疑問さえ明らかにされていない。そこで、第6次調査からは、この子持ち古墳に集中して発掘調査を実施することにした。

3.1.2. 8号墓、9-1号墓、9-2号墓、10号墓の発掘(図3)

このグループでは、主要古墳である8号墓の南側に、小古墳3基(9-1号墓、9-2号墓、10号墓)が配置されている。従来知られてきた子持ち古墳とは異なり、小古墳が主要古墳に接せず独立している。しかし、9-1号墓、9-2号墓、10号墓の石室の大きさから判断する限り、子供の墓であることは間違いない。このようなタイプの子持ち古墳は、私たちの調査ではじめて確認されたものであり、従来の子持ち古墳より一段階古いタイプではないかと推測している。主要古墳である8号墓からは、ウナム・アン=ナル系の土器や銅鉱石また二枚貝、緑色顔料が出土している。小古墳からも



図3 8号墓、9-1号墓、9-2号墓、10号墓

同様に、銅鉞石や二枚貝、土器片、紅玉髓ビーズが出土しており、8号墓と比べて副葬品に大差ないことが注目される。

3.1.3. 23号墓、22号墓、21号墓、20号墓、19号墓の発掘(図4、5)

23号墓は典型的な子持ち古墳である(図4)。主要古墳である23号墓の南側に接するように計6基の小古墳(S-1、S-2、S-3、S-4、S-5、S-6)が築造されている。小古墳S-6からは子供のものと思われる骨片が出土している。主要古墳からはウンム・アン・ナル系の土器や紅玉髓ビーズ、二枚貝が出土した一方、小古墳からもメソポタミア系の土器や紅玉髓ビーズ、縞瑪瑙ビーズが出土している。主要古墳と小古墳では副葬品に大きな差がなかったようだ。

また、23号墓の西側に弧状に比較的大きい独立した小古墳が4基(22号墓、21号墓、20号墓、19号墓)配置されている(図5)。当初大きさから大人との墓と想定したが、22号墓と21号墓を発掘した結果、22号墓からは6歳前後の小児の人骨が、21号墓からは6歳～12歳の小児の人骨が出土した。このような事例はいままで知られておらず、ディルムンの子供の葬制は、従来考えられているよりもはるかに複雑であることが示唆された。なお22号墓からはウンム・アン・ナル系の土器と紅玉髓ビーズが、21号墓からは緑

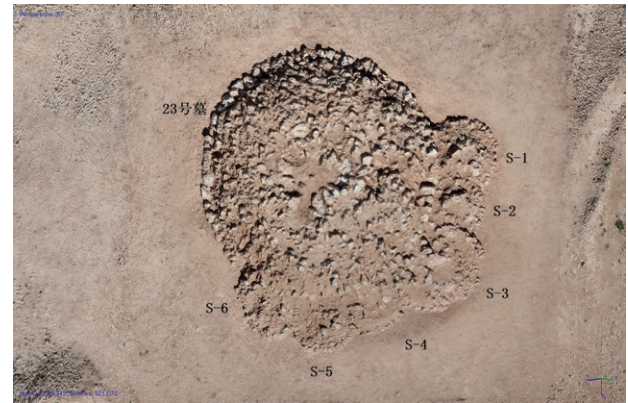


図4 23号墓(6基の小古墳が南側に付随している)



図5 23号墓と21号墓、22号墓

色顔料と二枚貝また紅玉髓ビーズが出土している。来年度以降も、子持ち古墳を中心に発掘を行う予定である。

3.2. バハレーンの水中文化遺産に関する予備調査

バハレーンでは、狭い国土を少しでも広げるため、海岸部の埋め立てが急ピッチで進められている。バハレーンの専門家は、沈没船といった水中文化遺産と一緒に埋め立てられているのではないかと危惧している。バハレーンは2014年にユネスコの水中文化遺産保護条約を批准しているが、急速に進む埋め立て工事に対し何ら具体的な対策を講じていない。

そこで、第6次調査では、水中考古学者の佐々木蘭貞氏に、バハレーンの水中文化遺産に関する予備調査を実施していただいた(図6)。今回は、ムハラク島にあるダウ船の造船場の調査を行ったほか、ディルムンの王都とされるカラートゥ・ル＝バハレーン遺跡周辺のシュノーケリングによる目視調査また地元の漁師やダイバーへの聞き取り調査を実施した。調査は4日間と短いものであったが、ダイバーから水中に沈んだ木



図6 カラートゥ・ル＝バハレーン遺跡周辺のシュノーケリングによる目視調査

造船の情報が寄せられるなど、成果があがった。今後とも水中文化遺産に関する調査を継続する予定である。

3.3. 社会的活動

発掘成果を地域社会に還元するため、毎年、バハレーン人を対象にした講演会や現場説明会また日本人学校における特別講義などを実施している。今年は、日本人学校の小学生を対象に現場説明会を開催し、20名ほどの小学生が遺跡を訪問した。

謝辞

第6次調査を実施するにあたり、金沢大学の藤井純夫先生、バハレーン文化古物局のハリーフア・アハメド・アル・ハリーフア王子(H. H. Shaikh Khalifa Ahmed Al Khalifa)、ピエール・ロンバル博士(Dr. Pierre Lombard)またサルマン・アル・マハリ博士(Dr. Salman Al Mahari)から多大なご支援、ご協力を賜った。この場を借り、感謝を申し上げたい。なお本プロジェクトは、科研費基盤研究(S)「中東部族社会の起源：アラビア半島先原史遊牧文化の包括的研究」(研究代表者：藤井純夫、研究課題／領域番号：19H05592)によるものである。

2020年1月11日に第1期で調査団長を務めた後藤健先生が逝去された。この場を借りて、あらためて後藤先生から頂戴したご学恩に感謝を申し上げるとともに、ご冥福をお祈りしたい。

参考文献

・ Abe, M. and A. Uesugi (in press) Reconsidering the Date of

Riffa Type Burial Mounds in the Early Dilmun Period: New Radiocarbon Data from Wadi al-Sail, Bahrain. *Al-Rafidan* 42.

- ・ Frohlich, B. and D. Ortner 2000 Social and Demographic Implications of Subadult Inhumations in the Ancient Near East. In: Stager, L. E., Greene, J. A. and M. D. Coogan (eds), *The Archaeology of Jordan and Beyond*, 122-132. Winona Lake, Eisenbrauns.
- ・ Gotoh, T., Saito, K., Abe, M. and A. Uesugi 2020 Excavations at Wadi al-Sail, Bahrain 2015-2019. *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 50: 169-186.
- ・ Laursen, S. T. 2017 *The Royal Mounds of A'ali in Bahrain*. Aarhus, Aarhus University Press.
- ・ 安倍雅史 2017「バハレーンに栄えた古代文明ディルムンの考古学」『文化遺産の世界』<https://www.isan-no-sekai.jp/column/20170426-2>
- ・ 安倍雅史 2017「ディルムンの起源と専門化の発展」『Waseda RILAS Journal』5号 482-484頁。
- ・ 安倍雅史 2019「真珠、石油、古墳の国 バハレーンへの国際協力事業(I)：古墳群の保存・活用・史跡整備に関するスタディー・ツアー」『文化遺産国際協力コンソーシアム Web Page 文化遺産コラム 文化遺産国際協力のいま』<https://www.jcic-heritage.jp/column/bahrain01/>
- ・ 安倍雅史 2019「真珠、石油、古墳の国 バハレーンへの国際協力事業(II)：日本隊による学術調査と新発見」『文化遺産国際協力コンソーシアム Web Page 文化遺産コラム 文化遺産国際協力のいま』<https://www.jcic-heritage.jp/column/bahrain02/>
- ・ 安倍雅史 2020「バハレーンに栄えたディルムンの考古学—ディルムンをめぐる最新研究動向」『You Tube 日本西アジア考古学チャンネル 西アジア考古学オンライン講義』
- ・ 安倍雅史・上杉彰紀・西藤清秀・後藤健 2017「ワーディー・アッ＝サイル古墳群から見た古代ディルムンの系譜」『西アジア考古学』18号 1-15頁。
- ・ 後藤健 2015『メソポタミアとインダスのあいだ—知られざる海洋の古代文明』筑摩書房。
- ・ 後藤健・西藤清秀・安倍雅史・原田 怜・濱崎一志・吉村和久・岡崎健治・上杉彰紀・杉山拓己・堀岡晴美 2016「古代ディルムン王国の起源を求めて—バハレーン、ワーディー・アッ＝サイル考古学プロジェクト2015—」『第23回西アジア発掘調査報告会報告集』114-120頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 後藤健・西藤清秀・安倍雅史・上杉彰紀・濱崎一志・吉村和久・岡崎健治・堀岡晴美・鈴木崇司・成田 竣 2017「古代ディルムン王国の起源を求めて—バハレーン、ワーディー・アッ＝サイル考古学プロジェクト2016—」『第24回西アジア発掘調査報告会報告集』94-99頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 後藤健・西藤清秀・安倍雅史・上杉彰紀・原田怜・岡崎健治・渡部展也・堀岡晴美 2018「古代ディルムン王国の起源を求めて—バハレーン、ワーディー・アッ＝サイル考古学プロジェクト2017—」『第25回西アジア発掘調査報告会報告集』72-76頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 後藤健・西藤清秀・安倍雅史・上杉彰紀・岡崎健治・堀岡晴美・原田 怜・間舎裕生・山口莉歩 2019「古代ディルムン王国の起源を求めて—バハレーン、ワーディー・アッ＝サイル考古学プロジェクト2018—」『第26回西アジア発掘調査報告会報告集』71-75頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 後藤健・西藤清秀・安倍雅史・上杉彰紀・岡崎健治 2020「古代ディルムン王国の起源を求めて—バハレーン、ワーディー・アッ＝サイル考古学プロジェクト2019—」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』80-84頁 日本西アジア考古学会。